

# 古典「漢文」指導の一試案(その一)

## — 入門期の文法と読解指導について —

鈴木 洋 一 郎

**要旨**—入門期における漢文指導にはいろいろな問題点がある。語学的指導か文学的指導か、書き下し文、また漢字体・送りがなはどのように取り扱うべきか、これらの諸問題にはいろいろな考え方があり不統一であるために、生徒の漢文学習上の困難点ともなっている。改訂の学習指導要領の中では、日本の古典の一つとしてまたは日本の文化体質に影響を与えて来た中国の古典としての漢文はその二重国籍性の矛盾が止揚されているといえ、その指導、特に読解指導の実際にあたっては、外国語的な処理が先行されるために語学的指導が第一に考えられるのである。本研究においては現在の漢文教育の展望の上に立って、生徒の学習困難点を追求しながら語学—漢文法の指導の方法を考え、文学鑑賞の試みとして唐詩の指導について述べたいと思う。これはその第一報告である。

### 1. まえがき

戦前、国語漢文と言われていたように漢文教育は国語のそれとは同等に、あるいは精神教育の教材としてはそれ以上の位置を占めていた。従って、愛国心の養成国民精神の涵養(昭和18年)のためとか現代支那の理解においた(昭和14年)漢文教育戦後になってはその目標やその教材に加えられた制限が大きくなり、教材の省略補充の基準を示して(昭和20, 8, 28)選択科目とされ、また民主思想に相反するものとし、漢文必修・選択両論がジャーナリズムでとり上げられ、国会での論議をよんだ。

しかしこの嵐の中でも漢文教材の新しい在り方が求められ、昭和22年の「中等国語」2・3年用の所謂「第4分冊」の中に漢文の背景をなす中国文化地理歴史習慣を学習させ、国語への影響や漢字・漢語の構成を知らせようとしたのは注目すべきことであり、戦後教育の一つの方向を示したともいえる。

しかし一般的に言って国語科の教師には国語国文学出身者が多く、漢文学への素養と学力の不十分のため漢文を軽視し、また授業することを忌避しがちであったし、その傾向は現在も続いている。そして漢文の教師には伝統の重さを口にして世の中の前進に背をむける保守頑迷の徒が多いとし、固定した教材と一定の伝統的な先人の解釈を守って、古典の意義を新しい視

点で検討し強調するものが少ないという偏見があった。

### 2. 本 論

1. 戦後教育の経過と反省
2. 漢文教育の問題点
3. 漢文学習指導の問題点
4. 漢文法の指導について

#### 1. 戦後教育の経過と反省

(一) 教育目標の設定にあたって、古典の意義と文化の特質把握を検討してきた。

昭和26年の学習指導要領の試案において漢文学習の範囲を「中国人日本人の作った文語体の詩文」と規定し、6つの指導目標を設け、1.漢語の語学的現解と効果的に用いる技術能力や、2.文章構造の理解と読解力を高め、3.国文学との関係から広く文学鑑賞力をつけ、4.日本や東洋文化に貢献した役割を知るなどが内容であった。これらの目標は新教育への意欲を示したもので、昭和31年の「要領」の目標や昭和35年の告示、更に昭和36年の改訂の中にも次のように生かされたのである。

「特に日本人の古典の一つとして定着させ、その読解力を養い思考力批判力を伸ばして心情を豊かにするとともに国語との関係・文化の特質意義を理解させようとする」のである。

(二) 教材選択の基準が新しい観点に立っている。

戦前の国家的要請や儒教道徳などから解放された漢文学習の目標が古典としての位置づけを求めするために従来の教材内容を分析し、これに批判的態度をもったのは正しいといえる。

経子類などで思想的教材の多いものについては、従来の儒家一本から、儒家の態度を人為の甚しいものとして真向から反対する道家、また尚古の時代錯誤のものとして法治を絶対視する法家のものをも採用し、また前者儒家のものにおいても礼義道徳をもって積極的社会を樹立しようとしていると考えをも採り入れている。また日本人の作品については概して歴史観や道徳上問題が多いので少数にとどめていた。

詩文においても戦前は参考教材として付随的に学習させられたが、現在は、中国文学における詩の位置を認識するとともに、詩人が時代や社会に向けて訴えた偽らざる心情や肉親・友人に示す深い人間愛や自然の悠久さに対する咏嘆などは、豊かな心情を養い人間形成には重要な教材としている。戦後、今までの唐詩に加えて、詩経や白居易の新楽府などがとりあげられ、国文学に影響を与えた長恨歌や伝奇小説などが従来の祭十二郎文や与微之書とともに登場したのは注目してよい。

(三) 国語・国文学との関係においてその価値を探索し、それを強調している。

古典語としての漢文の価値は印欧語系文化や教育におけるギリシャ・ラテン語のもつ役割を演じていることは次の各点からもわかる。

まず文字のなかった日本の歴史記録の資料であるということ。諸記録の散失した飛鳥時代の文化はヴェールに包まれながら、僅かに残る漢字・漢文の資料は日本歴史の貴重な記録となっていることは忘れることができない。次に、万葉がなやカタカナ・ひらがなの源流となっているのは周知のことであるが、東洋（中国）人の人生観が日本人の精神の中に固定して来たという歴史にも関心をもたねばならない。古来、文学作品は万葉や平安の諸物語でもわかるように咏嘆的（まこと・ものあわれ）なものが優位を占め、思想性の乏しい国文学が主流をなしていた。これらの国民性に論理的に思考や個人中心から社会凝視、更に世界観を変えさせたのには仏教思想の普及もあるが、書経や春秋が書紀や大鏡に影響のあったこと、老荘系の教えが中世の隠遁文学や芸道の理念確立一幽玄などに重要な役割をもっていることが言われている。漢文を読めない国文学研究はありえないともいえる。

2. 漢文教育の問題点

まえがきの中で漢文の古典としての価値について述べた。従来古典とは日本の古典（古文）を意味し、国語甲の中でも、また古文に対する漢文としてその位置づけがあったが、こうした反省から古典乙の中に古文と漢文を含ませたのは新しい漢文教育の方向を示したものである。しかしその学習指導面には次のような多くの問題点がある。

1. 漢文学習の入門期はいつからがよいか
2. 授業時間数、古文との比率
3. 漢文教師の希望とその養成
4. 新教材の発掘と指導法の工夫
5. 語学教育か、古典（文学）教育か
1. 漢文学習の入門期はいつからがよいか。

生徒が漢文の基本文型に接するのは高校へ入学してからであるから、語学としての漢文の学習は英語より3年も遅れ、その授業時数も少ない。旧制中学において5か年で10時間あったのに比べ、高校3か年で3時間で、戦前、中1から漢文法に時間をかけ文語文重視の国語教育と相俟って効果を挙げたのとは比較ができない。しかし現在文語文に習熟していない高1の生徒に、古文と平行的に漢文口調を教えるのは非能率的であった。本校においては文語文法の終えた2年生を入門期としているが、中等教育全体のカリキュラムを考えない限りこれを変更することは困難である。少なくとも文語の文章論的な学習は中学においても相当徹底させておきたいものである。

2. 授業時間数と古文との比率

高校3か年で3時間の学習の中で漢文法を始め経子、史伝、詩文類を通して東洋文化の特質……の理解という目標を達成するのは国語科教師の力をもっては難しい。従って少時間のため特定の教師に委任したり、また古文が2倍の6時間であることなども古文と漢文の比率からいって問題がある。最近の教材はこの不均衡をなくすため教材に古文でその影響を受けたと思われるものを参考文として掲載しているが、古文においても単に通史的に教材を配列するのではなく、漢文との関係において、その教材の参考文として掲載することも必要ではないかと思う。

3. 漢文教師の希望とその養成

現在、大学の漢文学科の定員も希望者も少なく、一方国文科への女子学生の進出とともに、新任教師の漢文の学力を低下をみせている。漢文学の思想内容や表現形式の理解また生徒への指導力の上から考えると、国文科の一部として漢文履修の学力程度では指導が不十分であり、教生の漢文授業の希望は少なく、またその不授業ぶりも不徹底であるの実情である。漢文の学習が高校大学の教育において真剣に再検討を要する時期に来ていると思われる。

4. 新教材の発掘と指導法の工夫

「現代国語」と比べて古典特に漢文ほどその教材が固定され、指導法に工夫の少ないものはない。採用の教材は確かに「不易」の古典でその価値は十分尊重されるべきであるが、それと同時に現代の次元における価値を再発見し、その解釈・指導にも工夫をすべきではないか。漢文教師は先人の解釈の伝承に安定した授業を行っていないか。また部分的には新教材の文章はあるが、指導のマンネリ化を避けるためにも、新鮮な教材の発掘が積極的になされることを期待し、従来の通解式の指導にも反省を加える

べきと思う。

### 5. 語学教育か、古典（文学）教育か

漢文教育が語学か、文学かということは結局形式技術か内容理解かということである。漢文はもともと中国人の書いた文であるから、外国語であり、当然、系統の異なる語学的取扱いが学習の第一歩となるであろう。しかし語学指導といても朝鮮で行なわれているといわれているような上から順に読み下す方法を用いることはできない。漢文の読み方は翻訳の一種の訓読式で上から書いてあるものをひっくり返して読むという約束ごとに従い、日本の独特な古文に訳しながら読むことになっている。正しい読み方があって始めてから内容への理解ができるのであるから、全時間の40%くらいは語学一語法中心の基礎学習を確実にさせ、古典乙Ⅱへ入る前から内容理解の文学中心へと考慮する必要がある。勿論乙Ⅱの段階においても語法の復習は行われるべきである。これは少なくとも高3の半数以上は語法についての基礎的知識が不十分であることから反省させられている。

### 3. 漢文学習指導の問題点

漢文の学習指導において重要なことは、徹底した教材研究と周到的指導計画、自信ある授業、そして正確な自己の授業評価であるが、それと同時に学習が教師と生徒との密接な相互作用であるという観点からは、生徒の学習困難点を十分に理解しておかねばならない。この入門期における学習困難点については嘗て本校の紀要第7集に発表したもので、その要点とその後指導上に考慮した諸点を挙げてみると、

#### 1. 漢字・漢語の読みに慣れない

教育・当用漢字の範囲内の中学教材に比べて漢文の教材には制限漢字以外の多くの漢字や漢文特有の新字（例えば不、将、為、未……など）が加わり、また旧字体がそのまま文中に使用しているものもある。古文においては早くから新字体（略字体）を積極的にとり入れているのに、漢文では一般に頭注において新字体を説明しているにとどまり、文章の字体には採用していない。本校においては数年前から略字体使用の教科書を採用の条件として、授業中は辞書を常用し、字源や漢字構成についても指導し、通読に抵抗の少ないように工夫して来た。

#### 2. 読みがな、送りがなが不統一である。

古典としての漢文であるから、歴史的かなづかいの適用をうけるのであるが、漢字の音訓の読みがなは表音式（現代かなづかい）にするのが教育的でないか、（妾せう漸やうやく……など）学習しやすいように考慮することが必要であろう。また現行漢文教材の訓点法は明治時代の末に国語調査委員会編集

の「送仮名法」と官報8630号掲載の「漢文に関する文部省調査報告」の「句読・返点・添仮名・読方法」という半世紀以上の資料に準拠しているが、生徒の学力や現代社会における古典のありかたから考えてその送りがなの多岐性は学習に不便と混乱を引きおこしている。（日…日ク日ハク、来…来ル来タル、食フ…食ラフ食フなど）この二点については厳格にするを避け読めさえすればよしとし、特に「ゆれ」の多い送りがなの場合は文語体で読んでいる限りよしとする巾のある指導を行なってきた。

#### 3. 漢文の独特な口調に親しめない。

調査の結果からもわかることであるが、生徒は漢字以上に漢文体の独特な口調に学習の興味を失わない読みに抵抗を感じている。戦前は教材や新聞記事などに漢文調の文語文に多く接し親んでいたの読み書きも比較的容易であった。入門期において非日常的な、また古文とも違うこの新文体の通読には非常に困難を感じている。これは漢文の授業時間が少ないのと文を「上り・下り」して読み、送りがなが細字であるなどの読みにくい理由もあるが、昔の素読中心の学習よりも内容理解への授業に早くはいらざるをえないために読みの指導が不十分となっている。即ち読んで漢文調を味わうことよりも古典として理解鑑賞に比重が加わっていると言ってよい。

漢文口調は確かに生徒にとって現実感が乏しい文であるが、その表現の簡潔さ、力強さ、意味内容の豊富さその上に一種のリズム感のあるこの文体はもう一度その長所を考え出す必要があるのではないだろうか。教材として現代国語の中の明治期の小説「鴉外の舞姫や露伴のものなど）や随筆（蘆花のもの）やまた評論（樗牛の美文調のもの）などを朗読させ、また文章に親しんみをもたせるためにも、現に高校生と同じ年令の作文を読ませることを考えた。次の文は石川啄木（17才）が盛岡中学の校友会雑誌に書いたものである。

三尺の陋舎の窮屈に堪へざる者は、出でて雄大なる自然の胸中に逍遥せよ。紛糾塵裡に倦みたるものは心眼を開いて無窮なる理想の天上に逍遥せよ・森羅錯然として然も乱れざる自然の胸中に遊びて人は其処に狭からず窮屈ならざる無限の「我」を見、浩蕩たる天上の光被に入りて人は其無象の瀟気の中に却りて動かざる明哲の「我」を見るなり。

意味内容は現高2の年令のときの作で簡単であるが、その用語と漢文体の高調子は驚嘆すべきものがある。

#### 4. 訓点の法則についての学習の時間が乏しい。

漢文入門期においてもまた高校3か年を通じても通読はできても訓点の法則を知りそれを正確に書き記す演習の時間は少ない。特にレ点と一二三……と

の組み合わせは最も学習困難点の一つである。白文による練習は高校の学習指導要領の学習範囲外であっても、正確な通読のためには演習は必要である。これは、まずレ点を、次いで一二三……の正確な練習をと、根気よく反復しその後両者の組み合わせの指導をと順序に従って行ない、また訓点を施した漢文と対照させ、訓読の基本的な性格を理解させることにより効果を挙げることができた。しかし文章内容の理解の指導に時間の不足を来たしてしまった。また将来のこの指導法の一つとして教育工学特にT・P・C（学習管理装置）などを用いてその誤答の箇所を指摘し個別指導やその誤りやすい原因を探求し除去するように試み、またその成果について発表したいと思っている。

この外、諸種の語法のうち入門期には次のような基本的なものの理解が不十分であるので注意している。

a 否定法…単純（不、未、勿、無……）一部、全部否定

b 呼応…再読文字や独特の副詞の呼応

c 反語法や不読文字

以上は表現形式上の学習困難点であるが、内容理解の指導においても問題点がある。

#### 5. 文章の大意把握が困難である。

文章を通読してその意味を考えてゆく漢文訓読法において、読後の大意把握特に一段落ごとのまとめが不十分であるのは漢語や文体上の通読障害のためにあることが多い。生徒が一通りは読んできても、大意を正確に理解させるためには教師が範読をしヒントを与えるなど指導上更に工夫が必要である。漢文の読解法が国語と同様に大意から部分・語彙解釈と進めるのが望ましいので、入門期においては語学的指導を中心につとめて通読第一主義にしながらも、後半においては、これに加えて範読を聞かせながら大意把握の練習をするように試みた。また作者やその時代思想（作者の人生観や社会観）や中国人の伝統的な自然観などにも注意したが、これは第二報告の「詩」の指導実践において発表してみたい。

#### 4. 漢文法の指導について

漢文法の指導は入門期における基礎的な学習で、語学的指導の一つであり、漢文の構造的な考察である。前述の学習困難点に基づく指導の実践を述べたい。

漢文—中国語は音韻論的には原則として単音節語であり、言語学上は孤立語で語彙自体いっさいの語形変化をおこさず（「読」で六つの活用の読みができる国語と違い）文法的職能はその形態からは判断できず主として文中における語の配列・順序や文の前後関係か

ら判断するということが学ばせる。また表意文字であり、日本語とは系統的に異質のもので語形変化を除けば、統辞論的には英語などに近似していることを承知させる必要がある。

これらの言語学的知識を背景にして、漢字・漢語の更に文法の指導にはいるのが普通である。漢字は当用漢字を中心として字源や音訓・字体や字順について、更に漢語の構造を説文解字の六書の解説を多くの用例で練習し、漢字のもつ造語力なども簡単な故事成語の読ませ文章に親ませることもできる。

漢文法は基本的文型と簡単な語法から始めるが、次のような内容が考えられた。

##### a 文型

漢文の語順は一般に英語に近いことは前述のとおりであるので比較しながら具体例を挙げて指導したが、大体次の8つの型が考えられた。

1. 主語—述語
2. 主語—述語—客語（目的語）
3. 主語—述語—補語
4. 主語—述語—客語—補語
5. 主語—述語—客語—客語
6. 述語—主語
7. 独立語、主語—述語—客語
8. 修飾語—被修飾語

これらの文型の用例は簡単に随時、作文して示してやることもでき、生徒自身にも極めて基本的な漢作文させてみることも興味をもたせる一方法である。このとき国語の膠着語的性格についても関心をもたせ、訓読にも注意させるように指導することも必要である。

##### b 語法

漢文の語法は文語文法とは本来異質的なものであり従ってその訓読の際に活用させることはむづかしく古典における文法の二重生活は学習上の一大負担でもある。しかし「……文語文法などとの関連に注意して無理のないように指導する」という漢文指導上の考慮点に従って指導することにした。（後注）

語法の初歩的なものとしては、次のようなものが考えられた。

- a 否定……単なる否定（不、無、勿）  
一部、全部 打消と副詞の位置によって読み方と意味の違うこと。
- b 仮定……もし、たとひ、レバ則（若、如、苟、仮、縦、則）
- c 反語……独特の副詞とその呼応のしかた。この用法は本来古文にはないもので、その一定の読み方に慣熟させ、意味を徹底させる。（安、何、如何、豈、何為）終尾

詞にも注意。

- d 不読文字……訓読されないが、孤立語的特質から考えれば本来は意味のある文字であるのでその点指導を加える（而，於，干，孚，矣，焉）
- e 再読文字……二度読み文字であるがこれに対して一度読みにしようとする試みがある。数少ない（9つ）ので正確に再読するよう注意する。
- f その他……（被，身，為～所）の受身（ヨシテ……シム）の使役の使，令遣，……スルニ～ヲ以テスや況ンヤ～ヲヤのような独特の語法もあるが，入門期における語法の指導は以上が適当である。

### 3. あとがき

この研究の本論である文法の指導については，その具体的な用例が少なくなってしまうが，教師が主体的に教材を選択するときは，生徒は漢文教材を日常生

活に関連のある親しみやすく興味あるものとして，自発的に学習のできるものとなり，そして能力個性に応じて指導し人間形成に役立つものと思う。入門期の例文もこの基準に基づいて選んできた。次の第二報告においては生徒指導の結果を調査しながら読解特に「詩」の指導について，詩教材の分類（整理中）や読解・鑑賞のあり方を研究してみたいと思う。

文語文法によって教えられない割読の例として

- (注) 1. 漢軍至以無渡 無ケン 文語文法にこの用法なし
2. 西出陽関無故人 出ヅレバ→出デナバ（無カランへの呼応）
3. 使役過去形でもセシム
4. 雨，雪，東，雨フル，東スと動詞を構成する
5. 韋編三絶 絶ツ→絶ユ韋編主語でない文型の7に相当す  
（韋編，孔子三絶之との意）